インカ道「ワリ～プエブロ・ビエッホ」区間調査報告

—インカ道の保全・活用を目的とした基礎調査—

大　谷　博　則*

General Survey of the Inca Road Huari-Pueblo Viejo Section:
Investigation for the purpose of conservation and use of the Inca Road

Hironori OTANI

要　約

現在、インカ道は世界遺産リスト登録に向けたペルー文化庁の取り組みによる文化的関心の高まりや近年のインカ道トレッキングによる観光価値の向上により、その保全と活用の重要性が高まっている。

しかし、ペルー文化庁によるプロジェクトではその登録活動に多くの資金と人的資源を割かれるため、保全・活用計画を提唱するための十分な調査・プロジェクトを実施できないのが現状である。

この現状をふまえ筆者は、ペルー共和国アンカシュ県カエホン・デ・コンチュコス地域を通るインカ道を基礎資料とし、インカ道の保全・活用するための考古学的、文献学的な基礎調査を2007年から実施しており、本稿ではその成果を報告している。

キーワード：インカ道、ペルー、カエホン・デ・コンチュコス地域、文化的ルート

Ⅰ．調査の概要

1. 目的

古来より、人、文物、情報の交流を担い、行政、軍事、宗教のために利用されてきたインカ道は、アンデスの歴史、文化、信仰等を理解する上で、極めて重要な意味合いを持っているが、近年における交通網およびその手段の変化や様々な開発事業等によって、急速にその形態、機能が失われつつある。本稿はペルー共和国、アンカシュ県に所在するワヌコ・パンパ（ワヌコ県）とマルカ・ワマチューコ（ラ・リベルタ県）を結ぶ路線の一区間である「ワリ - プエブロ・ビエッホ・デ・ポマバンバ（以下、プエブロ・ビエッホ）」区間および、その周辺に分布する文化遺産と文化的景観を統一的、総合的に調査し、将来におけるインカ道の保全と活用を図るための基礎

平成21年９月18日受理　*文学研究科文化財史料学専攻博士後期課程

資料を整理することを目的としたものである。

近年は、険しく、清浄な自然を求めて、多くの登山客等が訪れるいわゆる癒しの場としての一面を持っており、インカ道トレッキングを希望する観光客は増加している。

また、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、アルゼンチン、チリの南米6ヵ国により、インカ道は「カパック・ニャン - アンデスの主要な道（Qhapaq Ñan - Main Andean Road)」として、2001年5月に世界遺産登録暫定リストに登載されている。そのため、世界遺産登録へ向けた各種取り組みが行われており、ますます、その注目度が高まっている状況にある。

2. 調査地区

本研究の対象は以下の通りとする。

① 調査地区

アンカシュ県カエホン・デ・コンチュコス地域中央域

② 調査路線

「ワヌコ・パンパ - マルカ・ワマチューコ」道ワリタンボ～プエブロ・ビエッホ区間

ワリタンボ（Huaritambo）～クチタンボコラル（Cuchitambocorral）～セロ・ヒルカンチャ（Cerro Jircancha）1・2～パリャワチャンガ（Pallahuachanga）1・2～マラカイ（Maracay）～インカ・ルイダンダラン（Inca Ruidandaran）～セロ・クチワチャナン（Cerro Cuchihuachanan）1・2～タンボ・デ・ワンカバンバ（Tambo de Huancabamba）～ヤウヤ（Yauya）～プカヤク（Puente colgante Pukayacu）～アゴ・クルス（Ago Cruz）～コリョタ（Collota）～ピスコバンバ（Piscobamba）～プエブロ・ビエッホ）（Pueblo Viejo de Pomabamba）

ペルー共和国では、ペルー文化庁主導の下、以下の6区間を最初に推薦する路線に指定している。古代アンデス文化を理解するうえで重要な諸センター間を結んでいる点や残存状態が良好であるなどの点から選択された。

① クスコインカ道1
「オリャンタイタンボ～アブラ・デ・マラガ～ラレス」道
(Tramo「Ollantaytambo - Abra de Malaga - Lares」)

② クスコインカ道2
「ニュスタイスパナ～チョケタカルポ～ヤナマ～チョケキラオ」道
(Tramo「Nustahispana - Choquetacarpo - Yanama - Choquequirao」)

③ 「ワヌコ・パンパ～マルカ・ワマチューコ」道
(Tramo「Huanuco Pampa - Marca Huamachuco」)

④ 「パチャカマック～ハウハ」道
(Tramo「Pachacamac - Jauja」)

⑤ ペルー、ボリビア間インカ道
「クスコ～ラ・ラヤ～プーノ～デサグアデーロ」道
(Tramo「Cusco - La Raya - Puno - Desaguadero」)
⑥ ペルー、エクアドル間インカ道
「ワンカバンバ～アヤバカ～ミテ・フロンテリソ」道
(Tramo「Huancabamba - Ayabaca - Limite Fronterizo」)

本稿では、④「ワヌコ・パンパ～マルカ・ワマチューコ」道の一区間である「ワリタンボ - プエブロ・ビエッホ」間のインカ道を対象にインカ道の道筋・現状、沿道地域に残る遺跡分布状況と保存状態を報告している。

この他に、インカ道の保全・活用を目的とした基礎資料として以下の調査が必要と想定されるが、紙面の都合もあり③④⑥⑦は別稿において取り上げる。

① インカ道の道筋の確認・実態調査
② インカ道に沿う地域に残る遺跡分布状況と保存の実態調査
③ インカ道に沿う地域の有形文化遺産、無形文化遺産、民俗文化遺産、名勝、天然記念物等の分布状況と保存の実態調査
④ インカ道（古道）の歴史的意義・沿革の調査
⑤ インカ道（古道）に係る文献資料の調査収集
⑥ インカ道周辺の環境の現状と特性調査
⑦ インカ道周辺の観光関連施設（宿泊施設、交通、医療機関、通信環境等）の実態調査

3. 調査対象

- インカ道（古道）および、それに付属する施設
  石畳、擁壁、切通、水路、宿駅（タンプ）、カンチャ（複数の部屋状構造物に囲まれた方形の空間）、カリャンカス（休息に使われていたカンチャ内にある方形の部屋状構造物）飛脚小屋（チャスキ・ワシ）、小石の塚（アパチェタ）、ワカ（聖所、湖、泉、山、洞窟、岩など）等
- インカ道（古道）周辺に残る遺跡

4. 調査計画

① 私と現地協力者によるインカ道（古道）道筋の概略把握と遺跡の第１次的調査を行う。
② ①の調査による諸情報等に基づき、古道道筋の確認のために私と現地協力者により一部区間において現地踏査を行う。

③　文献調査、現地踏査の成果等をまとめて、インカ道の保全・活用を目的とした基礎資料を作成する。調査に不足がある場合は、2010年に予定している調査で補完する。

5. 現地調査協力者

①　東西カエホン探検隊

- アリエル・ラミレス・ロドリゲス
  (Ariel Ramírez Rodríguez)
- アドリアン・エウヘニオ・メヒア・コンデ
  (Adrian Eugenio Mejía Conde)

②　調査協力機関

- アンカッシュ県行政府　海外通商観光局
  (Región Ancash, Dirección Regional de Comercio Exterior y Turismo)
- ポマバンバ郡、M.ルスリアガ郡、C.F.フィッツカラルド郡行政府
- パロバンバ区、ムスガ区、リャマ区行政府
- ポマバンバ郡、M.ルスリアガ郡、C.F.フィッツカラルド郡行政府教育委員会（UGEL）
- 「チンボテ・ロサンジェルス大学・ポマバンバ校
  (Universidad "Los Angeles" de Chimbote)」
  「公立ポマバンバ教育大学
  (Instituto Superior Pedagógico "Pomabamba")」
- ポマバンバ郡、M.ルスリアガ郡「文化の家（Casa de Cultura)」
- 住民組織
  「コリ・ヤイノ（Asosiación Qory Yaino)」
  「山の公的扶助協会オジェーロス - チャビン
  (Asociación de Auxiliares de Montaña - Sector Olleros / Chavin)」

6. 調査期間

第１次：2007年10月01日～2007年11月26日
第２次：2008年10月09日～2009年02月04日

2007年

10月02日	文献調査（リマ市内）
10月20日～10月23日	地図資料調査（ワラス市内）
11月17日～11月21日	インカ道踏査（ヤウヤ～プカヤクの吊橋～リャマ）

2008年

10月09日～11月02日	文献調査（リマ市内）
11月16日	文献調査（ポマバンバ市内）

11月17日	インカ道踏査（プエブロ・ビエッホ周辺）
11月19日～11月21日	インカ道踏査（リャマ～プカヤクの吊橋）
11月22日～11月30日	インカ道踏査（ピスコバンバ～ポマバンバ）
12月02日	インカ道踏査（リャマ～ピスコバンバ）
2009年	
01月10日～01月16日	インカ道踏査（カニナコとサン・ルイス周辺）
02月04日	地図資料調査（リマ市内）

2007年度から2008年度にかけて、アンカシュ県内のインカ道について、道の実態や現況の調査を行ってきた。保存管理する対象であるインカ道を比定するための文献調査ならびに踏査を実施してきた。

Ⅱ．インカ道「ワヌコ・パンパ～マルカ・ワマチューコ」道

1．インカ道（カパック・ニャン）の概要

インカ道とは、南米の太平洋岸で栄えたインカ帝国で整備された道路網のことである。インカは、その拡大の過程で、支配地域の階層的集団管理体制を効率よく維持するために、インフラストラクチャを整備した。16世紀のクロニスタ（年代記作家）は、王の命令一つで瞬く間のうちに山をならし、岩を砕いて広く立派な道を建設したと記している（Cieza de León 1973［1553］）。この道路網の実態を調査したジョン・ヒースロップによれば、帝国を縦走するような形で、海岸沿いに１本、山の中に１本の幹線道路が配置され、その両者を結ぶような形で東西方向に支線が設けられたという（Hyslop 1984）。カパック・ニャンとはこの２本の幹線道路を指しており、「インカ王道」を意味する。総延長４万㎞にも達する。ただしこれらすべてがインカの手によって新たに建設されたわけではなく、インカ以前にさかのぼる交易路なども利用された。インカ道には宿駅（タンプ）が配備され、インカ軍の遠征、インカ高官の旅行に利用されたほか、各地方でとれる物資の統制を行うための倉庫施設も備えていた。また情報を伝える飛脚（チャスキ）もインカ道を走り抜けた。

インカ道は、大別すると、帝国北部チンチャイスーユ、東部アンティスーユ、南部のコリャスーユ、西部のクンティスーユへと向かう４方向への路線に分かれる（第１図）。

2.「ワヌコ・パンパーマルカ・ワマチューコ」道の概要

ワヌコ・パンパーマルカ・ワマチューコ道（第２図）はクスコに発しインカ帝国北部エクアドルのキトへと至るチンチャイスーユに大別されるインカ道の幹線道の一区間をなしている。また、現在のラ・パス（ボリビア）～クスコ（ペルー）～キト（エクアドル）を結ぶカパック・ニャン（インカ王道）の一区間としても比定されている。

また、ワヌコ・パンパならびにマルカ・ワマチューコは大遺跡であり、インカ道を理解する上で極めて重要と考えられる。以下では、両遺跡の概要をとりあげている。

ワヌコ・パンパ遺跡はアンカシュ県南東側に位置するワヌコ県西部、海抜3800mの高地高原に所在する。また、同遺跡はインカ地方センターの中でも最も綿密な調査が行われた遺跡の一つである。アメリカ自然史博物館のグレイグ・モリス（Craig Morris）とドナルド・トンプソン（Donaldo E. Thompson）らによる調査結果から、さまざまなデータが得られた。特に、建築構造はミニ・クスコともいえるほどインカの世界観が反映されており、550×350mの方形広場の中心には、クスコ同様にウシュヌと考えられる基壇が建設されている。広場外側には、ウシュヌから発する放射線状の広がりに沿うかのようにクスコ様式の建物が配置されており、クスコの太陽神殿（コリカンチャ）からのセケ線ならびに、4分割されていたクスコの空間構造の模倣と解釈される。この他にも、広場北側では、アクセスが非常に制限された空間が発見され、その中から多数の紡錘車と大きな壺の破片が出土した。紡錘車は織物製作、大壺は地酒チチャの製造と解釈されており、この空間は年代記で記されたアクリャワシであった可能性が高い。加えて、500を数える倉庫群がやや離れた斜面に整然と並んでおり、これはアンデスでは最大規模を誇る（Morris and Thompson, 1985）。

関（2005; pp 169-170）によると、マルカ・ワマチューコ遺跡は北高地モチェ川上流域に位置する地方発展期からワリ期にかけての大遺跡である。海抜3750mの比較的平らな山頂部に長さ約4.5kmにわたって細長く分布している。複数の建築複合が確認されており、セロ・デル・カスティーヨ複合が最も大きく特徴的である。「塔」と呼ばれる高さ6から10mに至る墓、回廊状の細長い建造物、広場に加えてカスティーヨと呼ばれる円形の建物から構成されている。また、遺跡全体は全長4km以上に達する二重の防御壁により囲まれている。主要な建物は400～900年頃に建てられたことが判明している。北はカハマルカ地方やエクアドル、南はカエホン・デ・ワイラスやカエホン・デ・コンチュコス地域、加えて海岸部との交易の中心として利用されていたと考えられる。

本調査で、「ワリタンボ～プエブロ・ビエッホ」区間を扱う理由として、以下の3点が挙げられる。初めに、本区間は環境的、文化的関係が強いコンチュコス地域の中央域に属し、また、同区間沿道の諸集落が文化的にも関連性が深い点などが挙げられる。

次に、本区間の南端に位置するワリタンボ遺跡から南方に下りワヌコ・パンパに至る区間において、住民参加によるインカ道の保全・活用を目的としたプロジェクトが実施された。なおこのプロジェクトは、地元のNGO組織「クントゥル（Kuntur）」と世界自然遺産に登録されているワスカラン国立公園の保護管理計画策定に携わってきた「山岳研究所（Instituto de Montaña）」との支援により実施された。そのため、インカ道の保全・活用を目的とした本調査との比較研究が容易である点も挙げられる。

最後に、ペルーにおける文化遺産保護はペルー文化庁主導では人的、経済的に限界があり、地域住民主体による文化遺産保護の手法を模索したいと考えている。現在、本調査区内において、

「東西カエホン探検隊」によるインカ道の保全、活用プログラムが実施されており、基礎調査の後に実施する予定であるインカ道の保全・活用を目的とした調査・研究への活用が容易である点が挙げられる。以上から、本調査では「ワリタンボ～プエブロ・ビエッホ」を調査区間としている。

3.「ワリタンボ～プエブロ・ビエッホ」区間に関連する文献資料

「ワリタンボ～プエブロ・ビエッホ」区間に関して言及する初期の年代記作家（クロニスタ）として以下が挙げられる。

- エステーテ・ミゲル

『提督エルナンド・ピサロが部下の弟を迎えるために行ったカハマルカからパチャカマ、次にハウハへの旅に関する報告書（Estete 1917［1533］）』

- シエサ・デ・レオン『ペルー誌（Cieza de León 1973［1553］）』
- ペドロ・ピサロ『ペルー王国の発見と征服（Pizarro 1978［1571］）』

時代は下るものの、その他に本区間を取り上げている年代記作家として以下が挙げられる。

- ライモンディ・アントニオ『ペルー－ペルー地理学史（Raymondi 1876）』、『資料集のための踏査記録（Raymondi 1942）』
- ウィナー・チャールズ『ペルー～ボリビア旅行記（Wiener 1880）』
- アントゥネス・デ・マヨロ・サンティアゴ「インカ帝国の偉大な道（Antunez de Mayolo 1927）」（『ペルーツーリングクラブ会誌』1927年５・６月号）

年代記（クロニカ）のほかに、同区間を踏査した報告書が複数あり、インカ道の比定に有効である。インカ道の調査で知られるジョン・ヒースロップ（John Hyslop）は本区間を踏査しておらず、本稿では取り上げていない。

新しいものでは、レイエス・エスピノサ・レイエスとペルー文化庁による「インカ道プロジェクト」の報告書がほとんど唯一の調査報告書であって、今回の調査でも、これらの成果に依拠し、加筆を試みることにした。

- アルベルト・レガル『古代ペルーにおけるインカ道（Regal 1936）』、『古代ペルーにおけるインカの橋（Regal 1972）』
- レイエス・エスピノサ・レイエス『偉大なインカ道－カパック・ニャン（Ricardo 2002）』
- ペルー文化庁『カパック・ニャンプロジェクト報告書（INC 2003ab, 2006ab etc.）』

調査を進めるうちに、「ニャン」はケチュア語で「道」を意味するが、ケチュア語アンカシュ方言では、「ナニ（Nanni）」と呼ばれていることに気付かされた。ただし本稿では、ペルー文化庁のプロジェクト名と異なり混乱するため、「カパック・ニャン」と呼ぶこととする。

このうち、最も詳細に記述されているのは『ライモンディによる文献』であるが、具体的な道筋となると、その比定はかなり困難な状況にある。

しかし、2003年以降に刊行されている『カパック・ニャンプロジェクト報告書』には、道筋等が記述・図示されており、本研究にとって大変役立った。第3章では、これらを中心に参考としながら、実地調査した成果を踏まえて、「ワリ - ポマバンバ」区間の現状を記していきたい。

Ⅲ.「ワリタンボ - プエブロ・ビエッホ」区間の現状

1. 位置と環境

本節では、ペルー文化庁による『カパック・ニャンプロジェクトの報告書（INC 2006a）』をもとに、本区間と関係する箇所を要約している。

コンチュコス地域中央域では、残存状態の良好なインカ道が多く報告されている。このインカ道は南北方向に走る幹線道と東西方向に走る支道に分けられる。この幹線道と交差するように西から東へと流れるマラニョン川の支流がある。主要な水系として南から北にプチカ（Puchca）水系、ヤナマヨ（Yanamayo）水系、ルパック（Rupac）水系がある。

プーナ地帯の草原を形成している沖積土（河川が運搬して漸次沈積して生じた土壌のこと）の広範な堆積層、ならびに地帯構造の強いプロセスと浸食作用を経て形成されたが水源となる、コンチュコス地域の河川は分水嶺として機能している。これらの河川は水源から河口に至るまで川幅がとても狭い。これらの河川が、中央山系と並行して流れるポマバンバ（Pomabamba）川、ワリ（Huari）川などの主要河川に合流している。これら南北方向に流れる河川は細長い盆地（カエホン）を形成しているため、コンチュコス地域はカエホン・デ・コンチュコス盆地と呼ばれている。

このような地形学的特質（ユンガ、ケチュア、スニ地帯では強い傾斜地や急峻な渓谷により分断され、プーナ地帯では気候と交通アクセスの困難さにより制限）がコンチュコス地域内での大規模集落の形成を阻害してきたと考えられる。一般的に本区間では、集住化に強い影響を及ぼす環境的制約のため人口密度が低い傾向にある。本区間にみられる集住形態は、自然発生的な小規模集落と碁盤目状の区画をもつ比較的規模の大きな集落に大別される。

初めに、自然発生的な小規模集落は、人口が少なく、農畜産業などの第一次産業に従事する人々により形成されており、比較的高度の高い渓谷の上流域に位置する傾向にある。また、医療、教育といった基本的なサービスへの配慮が不十分である。基本的には、小学校の開校に留まっている。小規模集落においては、小学校は教育機関としてだけでなく、医療サービス、社会行事や公共集会の場といった社会機関としても機能している。

次に、碁盤目状の区画をもつ比較的規模の大きな集落はその起源を植民地時代にまで遡ることが多く、スペイン人によるレドゥクシオンとして建設された。現在では、コンチュコス地域内で医療、教育、上下水道、電気、通信などの基本的サービスを受けられる唯一の場所である。しかし、これらのサービスの質と範囲は極めて低い水準にある。大規模集落はワリ、ピスコバンバ、

ポマバンバといった郡都に限られている。この中で特に、ワリ、ポマバンバでは毎週定期市が開かれており、周辺地域住民のコミュニケーションの場として機能している。

本区間では、農牧業といった第一次産業を中心とした景観が広がっている。農業は地域経済の根幹を成しており、農作物は主に世帯内で消費される。わずかな余剰生産物は市で現金化する。農業形態は主に非灌漑農業であり、海抜2500mから3700mで営まれている。牧畜業はイチュ（学名Stipa ichu）が自生する海抜3800m以上のプーナ地帯で主に営まれる。基本的には草原地帯である。農作物と異なり、畜産物は市での現金化もしくは地域内での消費に割り当てられている。さまざまな条件下で、畜産業は地域住民の唯一の現金収入の手段である。

二次産業としては、コンチュコス地域中部域、ワリ郡、サン・マルコス区のアンタミナ鉱山会社（Compañía Minera Antamina）により所有、操業されるペルー最大の生産量をもつ銅亜鉛鉱山（海抜4200m）が挙げられる。アンタミナ鉱山は2001年から操業が開始されており、その鉱廃水はプチカ川へと排出されており、下流域に与える負の影響が懸念されている。

本区間では、第三次産業（商業活動）は盛んではない。基本的には、アンカシュ県都ワラスもしくは海岸部から購入している。コンチュコス地域中・南部域に属するワリでは首都リマから、中部域に属するピスコバンバ、ポマバンバではアンカシュ県都チンボテから商品を購入している。コンチュコス地域では、多くの住民が商品の購入や現金収入や基本的サービスの享受を求めており、都市部への現金、人口の流出が問題となっている。

現在、コンチュコス地域の交通網は次の３層により構成されている。第１に、プランカ山群を横断してコンチュコス地域への幹線道（車道、基本的には未舗装）として、カエホン・デ・ワイラス盆地ならびにチンボテ市、首都リマなどの海岸部からのルートがある。現在では、海岸部や都市部との関係性が重視されるため、主要ルートが東西方向に軸をもつ傾向が強い。以下では、南から北に各河川流域に沿ったルートを列挙していく。

- プチカ川沿いのルートは、カタック（Catac）～チャビン・デ・ワンタル（Chavín de Huantar）～ワリ（Huari）である。
- ヤナマヨ（Llanamayo）川沿いのルートは、ポマバンバ～ピスコバンバ～ヤナマ～ワラスである。

すべてのルートは舗装されておらず、例外的にカタック～チャビン・デ・ワンタル間ならびに海岸部へとつながるルートの一部のみコンクリートなどで舗装されている。

第２に、地方道（車道、未舗装）は商品の流通ルートとして機能している。路面状態は悪く、普通貨物自動車を対象とした道路である。

第３に、歩行者を対象とした山道があり、耕作地や近隣集落など生活圏内の移動に利用される日常の生活路として機能している。これらの里道の中にはインカ道も含まれている。このインカ道はコンチュコス地域の主要な河川を横断する唯一のルートである。先スペイン期には、主要ルートは南北方向に軸をもっており、その道筋は西から東（海岸部からアンデス高地）へと向かう現在の交通網ときわめて対照的である。

インカ道の重要性として、先スペイン時代だけでなく、植民地時代、共和国時代を通じて材木

や小麦、ジャガイモ、畜産物などの運搬経路として利用されてきた点が挙げられる。車両通行を目的とした道路建設はアンデス高地（コンチュコス地域）への海岸部の影響力を強化しており、ワラスやチンボテ、リマといった都市部への人口流出や、コンチュコス地域の統合を妨げるなどの悪影響を与えている。

現在、一部区間を除き本区間の地域住民による利用減少傾向にある。

タンボ・デ・ワンカバンバ～ヤウヤ間は、以前から耕作地への移動ルートとして地域住民により利用されている。

ヤウヤ～プカヤクの吊橋～リャマ間は、現在、両区行政府によるインカ期の吊橋の復元・架け替えが行われており、同区間の利用は増加傾向にある。また、リャマ～アゴ・クルス間は以前からの利用が継続している。2007年以降リャマ区住民によるインカ道を含む山道の清掃活動が実施されており、同区間の利用は増加傾向にある。以上の変化は、本調査区で2004年から活動している住民組織「東西カエホン探検隊」に依るところが大きい。

2. インカ道「ワリタンボ～プエブロ・ビエッホ」区間の現状

（1）ワリ郡

今回の調査区間の始点であるワリ郡は、アンカッシュ県の最東端、山岳地帯に位置し、北は西からC. F.フィッツカラルド（C. F. Fitzcarrald）とアントニオ・ライモンディ（Antonio Raimondi）、東はワヌコ（Huanuco）県に接し、南はボログネシ（Bolognesi）郡に、西は北からカルワス（Carhuaz）、ワラス（Huaraz）、レクワイ（Recuay）郡に隣接している。その面積は2771.90㎢で、人口は62598人である。郡都はワリで、海抜3149メートルに位置する（INEI 2006）。さて、インカ道はカハイ区をワリ川に沿って北上し、ワリ区を通り北のC. F.フィッツカラルドへと抜ける。

① ワリタンボ～クチタンボコラル

インカ道はワリ市東側斜面情報を通過し、カハイ市の西側斜面下方を抜けワリタンボ遺跡へと向かう。ワリタンボ遺跡までのこの区間のインカ道の残存状況は悪く、擁壁やその他の関連遺構は残存していない（INC 2003b, Ricardo 2002）。

ワリタンボ遺跡は大きく２つのエリアから構成されている。一方は、方形の平面プランをもつコルカ（倉庫）が20から30基並んでおり、もう一方は、残存状況が悪く推定が困難であるが居住区の可能性が指摘されている（INC 2003b）。レイエスによると農業用テラスの存在も記述されており、インカ期のタンプと集落があったと考えられる。

レガルによると（Regal, 1936; pp. 65-66）、インカ道はワリタンボを通過し、ワリタンボはワリャオチャカ（Huallaochaca）川左岸、ワリ市正面に位置していた（Antunez de Mayolo, 1927）との記録があるが、現在のワリタンボの位置情報と齟齬があり、かつ川も比定することができなかった。

インカ道はワリタンボ遺跡から北へ抜けており、ワリ川の右岸を通り、およそ６㎞にわたり道

幅4mで石の擁壁が確認されている。道の残存状態は悪い。コリョタ（Collota）集落への間道、チャルコ（Charco）、ウシュヌ（Ushno）集落への間道と分岐しながらモノ（Mono）山とケリャ（Quella）山の裾野を北へと延びている。最後は、ワリ川の支流であるヤナガガ（Yanagaga）川を渡る。その橋は復元されたものであるが、先スペイン期にさかのぼる可能性がある（INC 2003b）。

ワリタンボ遺跡とこの橋に関しては、エステーテにより、以下のように言及されている（Estete 1917）。「…そして、（エルナンド・ピサロ［Hernando Pizarro］は）グゥアリ（Guary）と呼ばれる都合のよい村で眠った。3レグアの道程の中程に別の橋と別の深い川が流れており、その川の両岸は絶壁であった。」

② クチタンボコラル～セロ・ヒルカンチャ1・2

クチタンボコラル遺跡はクチコラル遺跡とも呼ばれる（Reyes, 2002 p. 89）。同遺跡はプーナ地帯からワリ川流域に少し降りたワリ郡ワリ区に位置する。遺跡範囲はおよそ500㎡と推定されており、2基の方形プランのカリャンカスにより構成されるカンチャが残存しており、その残存状態は悪くない（INC 2003b）。

クチタンボコラル遺跡からタンボ・デ・ワンカバンバ遺跡にかけて、擁壁、石敷ともに残存している区間が多く、本調査区間内で最もインカ道の保存状態が良好であり、関連する遺跡も多く報告されている（INC 2003b）。またレイエスによると、クチタンボコラル遺跡からパリャワチャンガ1・2遺跡間のインカ道の構造は特徴的であり、その地域性が指摘されている（Reyes, 2002）。2009年現在、自身による踏査が実施できておらず、また収集した資料に不備があり、インカ道に関する詳細な記述は2010年以降に実施する調査報告において補完する予定である。以下、セロ・ヒルカンチャ1・2は順に遺跡情報を記述するにとどめる。

（2）C.F.フィッツカラルド郡

ワリ郡に続いてインカ道が通過する郡はC. F. フィッツカラルド郡である。C. F. フィッツカラルド郡は、アンカッシュ県の東側中央部、山岳地帯に位置し、北はM. ルスリアガ郡、東はワヌコ県に接し、南はアントニオ・ライモンディ郡とワリ郡に、西は北からアスンシオン（Asunción）郡とユンガイ（Yungay）郡に隣接している。その面積は624.25㎢で、人口は22761人である［INEI 2006］。郡都はサン・ルイスで、海抜3131メートルに位置する。さて、インカ道はヤウヤ区を通り北のM. ルスリアガ郡へと抜ける。

① セロ・ヒルカンチャ1・2

セロ・ヒルカンチャ1遺跡はヤウヤ区に位置する。方形の基壇状構造物が残存するだけであり、その範囲は90㎡と報告されており、遺跡の保存状態は悪くない（INC 2003）。

セロ・ヒルカンチャ2遺跡はヤウヤ区に位置する。セロ・ヒルカンチャ1遺跡と同規模の方形の基壇状構造物が残存しており、その範囲は90㎡であり、遺跡の保存状態は悪くない（INC 2003b）。

② パリャワチャンガ１～マラカイ～パリャワチャンガ２

パリャワチャンガ１遺跡はヤウヤ区に位置する。２基の方形の構造物が残存している。遺跡規模は500㎡であり、遺跡の保存状態は悪くない（INC 2003b）。レイエスによるとパリャワチャンガ１・２遺跡はインカ・パリャワチャンガ遺跡と呼ばれており、ケチュア語では「インカ王女生誕地」を意味する言葉であると報告されている（Reyes, 2002）。

パリャワチャンガ２遺跡はヤウヤ区に位置する。１基の方形構造物が報告されており、その規模は90㎡である。遺跡の保存状態は悪くない（INC 2003b）。

ペルー文化庁による報告ではパリャワチャンガ２遺跡とマラカイ遺跡との位置関係に混乱が見られるが、本稿ではより原資料に近いと考えられる『カパック・ニャンプロジェクト報告書（INC 2003b）』に基づき図面を作成している。2010年以降の調査で確認する必要がある。遺跡間の位置情報に混乱があるため、マラカイ遺跡は単一の項目として扱う。

本区間は幅４～８ mの直線道が約700 m確認されている。保存状態は普通である。

③ マラカイ（Maracay）

マラカイ遺跡はヤウヤ区に位置し、遺跡規模は1000㎡とされる。レイエスはマライカヤ遺跡と報告している。マラカイ遺跡は大きく２つのエリアから構成されており、一方は38の部屋状構造物により構成される方形構造物であり、もう一方は、４基の方形構造物とカリャンカが報告されている（INC 2003b）。レイエスによると、本調査区間最大規模のタンプ遺跡であり、約90km北に位置するパリアチュコ（同じくタンプ）と対になる遺跡と考えられている（Reyes, 2002）。また、コンチュコス地域において10年以上考古学調査を実施してきたアレクサンダー・エレーラ（Alexander Herrera）によると、同遺跡周辺は良好な耕作地に恵まれており先スペイン期の集落があったと考えている。また、地元の資源よりも道路建設の利権により強い関心をもつ大規模な社会・経済組織の存在を推測される（Wassilowsky, 2001; p 76）。

④ インカ・ルイダンダラン～セロ・クチワチャナン１・２

インカ・ルイダンダラン遺跡はペルー文化庁の調査では報告されておらず、レイエスにより記録された遺跡である。レイエスは、監視塔もしくは飛脚小屋（チャスキワシ）と考えている。遺跡の立地が渓谷の両斜面を走る古道を視認できる場所に位置することがその根拠となっている。また、インカ・ルイダンダラン遺跡から支道が分岐しており、その道幅は狭く自然傾斜に沿い、幹線道と並行するように延びているとも報告されている（Reyes, 2002）。

本区間では、約100mの道路遺構と３段の石段が報告されている（INC 2003b）。石段は高さが約１mあり道の擁壁のようである、階段の幅は８mほどである。その後、道幅は10mに広がり、バランダヨ（Barandayoj）山の裾野を通過するにしたがいその道幅を減じ、２mに至る。擁壁の高さはおよそ１mである。

⑤ セロ・クチワチャナン１・２～タンボ・デ・ワンカバンバ

セロ・クチワチャナン１遺跡はヤウヤ区に位置し、その規模約30㎡の基壇状構造物が残存して

いる。遺跡規模は約100㎡とされる。環境的要因からその保存状態は普通である（INC 2003b）。

セロ・クチワチャナン２遺跡はヤウヤ区に位置し、方形の基壇状構造物が残存している。遺跡規模はおよそ100㎡とされる。環境的要因からその保存状態は普通である（INC 2003b）。

本区間では、３㎞の道筋が記録されており、現在の道幅は約８ｍであり、道の両側に擁壁として機能していたと推測される擁壁が高さ0.5ｍほど、幅約１ｍ残存していることから、以前の道幅は約10ｍと推定される。小さな渓谷に入るにしたがい道幅を減じ、約６ｍに至る（INC 2003b）。

⑥　タンボ・デ・ワンカバンバ～ヤウヤ

タンボ・デ・ワンカバンバ遺跡はヤウヤ区内、ハトゥンケングア（Jatunquengua）山の裾野、ミラバンバ（Mirabamba）流域の耕作地内に位置する。方形プランの構造物が３基残存している。遺跡規模は500㎡と報告されており、これらの構造物は「ピルカド（pircado）技法」により建造されている（INC 2003b）。

インカ期のタンプ遺跡と考えられており、初期の年代記にも言及されている。また、テーヨによりヤウヤの石碑（Yauya Stela）などが報告されている。ヤウヤ区と周辺では多くの石碑や石彫が残されており、個人収集家により保管されている事例も多い。

本区間は、現代の集落であるタンボと区都ヤウヤを結ぶルートであり、インカ道は残っておらず、道筋の比定は不可能である（INC, 2003b）。

タンボを抜け北上すると、長さ約３㎞、幅が５ｍほどのインカ道が確認できる。ラヤン（Rayan）付近で、ヤウヤとサン・ニコラスを結ぶ地方道によりインカ道は５ｍほど切断されている。その保存状態は悪い。

ラヤンを抜けヤウヤ区都に向かい北上すると、長さ約２㎞、幅およそ６ｍのインカ道が報告されている。本区間は、現在、耕作地へのルートとして機能している。さらに北上すると切り立った崖になっており、地域住民によると、70年代に起きた地崩れもしくは地滑りにより崩落したとのことである。崩落個所を除き、その保存状態は普通である（INC 2003b, 2006b）。

⑦　ヤウヤ～プカヤクの吊橋

アルベルト・レガルの報告によると、インカ道はヤウヤを通過している（Regal, 1936; p 66）。ただし、アルベルトの報告書はその道筋が本調査区間と異なる区間があるため注意が必要である。

本区間はヤウヤ区都を抜け、プカヤクの吊橋へと下る道筋はかなり限られているが、そのルートは道幅が狭いところでは0.5～１ｍにまで減じている。ヤナマヨ川に高度が近付くにしたがい、高さ約１ｍの擁壁が残る区間が50ｍほど続きインカ道が確認できる。その後、小さな渓谷にしたがい進路を北西から西へその後北へとかえ、プカヤクの吊橋へと至る（INC 2003b）。

（３）M. ルスリアガ郡

C. F. フィッツカラルド郡に続いてインカ道が通過する郡はM. ルスルアガ郡である。アンカッシュ県の東側中央部、山岳地帯に位置し、北はポマバンバ郡、東はワヌコ県に接し、南は西からユンガイ郡とC. F. フィッツカラルド郡に、西はユンガイ郡に隣接している。その面積は730.58㎢

で、人口は28091人である（INEI 2006）。郡都はピスコバンバ市で、海抜3281メートルに位置する。さて、インカ道はリャマ区からムスガ（Musga）区、ピスコバンバ区、カスカ（Casca）区を通り北のポマバンバ郡へと抜ける。

① プカヤクの吊橋～アゴ・クルス

プカヤクの吊橋とはインカ期の吊橋（2006年に復元工事がペルー文化庁の監修のもと終了）と考えられる吊橋の橋台部分が残存していたため、復元された位置情報は確かなものと考えられる。吊橋の名前はその土地の名前プカヤク（リャマ区）により命名されたようである。

しかし、現在の復元された状態と年代記や報告書の内容とに齟齬が見られるため注意が必要である。以下、吊橋に関する記録を挙げておく。

エステーテはカハマルカに向かう際に、組紐で装飾された並行した２本の吊橋について言及している。ピスコバンバに至る行程の中程に別の深い川が流れており、その川を渡るために２本橋がかけられていた（Estete, 1553; p 100）。

また、ライモンディはエステーテのふれるこの川はとても深い渓谷を流れるヤナマヨ（Yanamayo）川である と指摘している（Raymondi, 1876; p 51）。

また、レイエスも少し遠方から吊橋の存在を確認しており、吊橋の橋台と推測される石積みによる擁壁（川面から10mほどの高さと記録）とその少し西側には倒壊した吊橋（川面から５mほどの高さと記録）を報告している（Ricardo 2002）。しかしながら、現在復元されているプカヤクの吊橋は川面からの高さが24m程ある。

このように、基本的には２本の吊橋が並行して架けられていたようであるが、現在復元された吊橋の位置では２本目を架けるためのスペースが不足している。その他にも、橋の水面からの高さも異なる。地元住民によると、以前かなり離れた地点に別の吊橋の残骸が残っていたとの証言もあり、複数の可能性が考えられる（Paurino, 2008）。

本区間は吊橋からヤナマヨ渓谷斜面を抜けるまで、その保存状態は悪く、部分的に擁壁や石段が残存するだけである。吊橋の倒壊（時期不明）以降「東西カエホン探検隊」が活動を開始する2004年まで、本区間は放棄されていた。レイエスの報告書には刺の多い灌木やサボテン（カクトゥス）のため、通行が困難な状態であったと報告されている（Ricardo 2002）。

その後、道幅約２mで両側に高さ約１mの擁壁が続いている。小さな渓流を渡り北上すると、インカ道は現在の車道により６mほど切断されている。その後、道幅約５mほどで北に続くが路面は雑草により覆われている（INC 2003b）。

さらに北ワランカヨク（Huarancayog）へと道幅５～６m高さ約1.5mの擁壁が続くが、カングラッシュ（Cangrash）付近で道幅約６m、擁壁の高さ約1.5mへと広がるが、同地域を抜けると道幅は減じ４mに至る。

その後、道幅が８mほどある本区間においてもっとも道筋の比定が容易な区間を抜け、アゴ・クルスへの間道へと至る（INC 2003b）。

② アゴ・クルス～コリョタ

アゴ・クルスにはアパチェタがあったとレイエスにより報告されている（Ricardo 2002）が、ペルー文化庁は記録していない。2008年度の踏査の際に、アゴ・クルスと考えられるアパチェタをムスガへの間道と分岐する地点にて確認しているが、その起源に関して確認しておらず2010年以降の調査で把握する必要がある。

本区間は、マタラ（Matara）村へと向かう間道との分岐を起点とし、道幅約４ｍでカシャウクロ（Cashaucro）山腹を抜け、小さな渓流を通過するあたりでその道幅を２ｍに減じている。その後コヨタ渓谷を通過する（INC 2003b）。

③ コリョタ～ピスコバンバ

コヨタ遺跡はピスコバンバ郡コヨタ流域に位置し、２基の方形プランの構造物からなる。遺跡面積は約200㎡と報告されている（INC 2003b, 2006b）。

本区間は、コリョタを起点とし、ピスコバンバ市の東側斜面上部を通過し、その進路を北から北西へと変え、ポマバンバ郡のプエブロ・ビエッホ遺跡へと至る。

このピスコバンバ市はインカ期の郡都と考えられている。シエサは、統治者のための石積みによる広大な宿泊施設があったとされる（Cieza de Leon, 1924）。2008年度現地調査の際に、インカ宮殿（Palacio de Inca）と推測される石壁が発掘されたとの話を聞くが、その報告書は入手できていない。

市内で現存する遺跡として、アルマス広場に面するカテドラルの裏に基壇状構造物があり、インカ期の祭壇（ウシュヌ）と言われている。2008年に聞き取り調査をしたところ、以前にアンテナが設置される際にコンクリートによる舗装が行われたとのことである。現在、そのアンテナは撤去されており、ゴミ捨て場と化している

エステーテによると、（エルナンド・ピサロは）斜面の中腹に位置するピスコバンバと呼ばれる大きな村に眠りに行った（Estete, 1553; p 100）。

ピスコバンバという地名はシエサによっても言及されており、かつてピスコバンバ郡内に高貴な方を対象とした石積みのとても幅が広く長いタンプもしくは宿泊施設があった（Cieza de Leon, 1924; p 251）。

ペルー人考古学者テーヨは、1922年当時、ワリ―ピスコバンバ間において発見されたインカ道に関連する壮大な建築物を高く評価した（Tello, 1922; p 38）。

（４）ポマバンバ郡

M. ルスリアガ郡に続いてインカ道が通過する郡はポマバンバ郡である。ポマバンバ郡は、アンカッシュ県の東側北部、山岳地帯に位置し、北はシワス（Sihuas）郡、東はワヌコ県に接し、南は西からユンガイ郡とM. ルスリアガ郡に、西はワイラス郡に隣接している。その面積は914.05㎢で、人口は28296人である（INEI 2006）。郡都はポマバンバ市で、海抜3185メートルに位置する。さて、インカ道はポマバンバ区を通り北のシワス郡へと抜ける。

① ピスコバンバ～プエブロ・ビエッホ～

ポマバンバ区に位置するプエブロ・ビエッホ遺跡はその面積約1,000㎡に及び、方形の建築複合によりカンチャを形成している（INC 2003b）。2008年度現地調査の時点では、農地利用による破壊が確認されている。その保存状態は悪い。

本区間では、石積みの擁壁が比較的連続して報告されている。具体的には、ピスコバンバ～ランラ・コルカ（Ranra Colca）間とヴィルカバンバ（Vilcabamba）～ルミチャカ（Rumichaca）にかけ石積みの擁壁が断続的に報告されている（Ricardo 2002）。

同遺跡周辺のインカ道はポマバンバ市東側斜面に延びており、プエブロ・ビエッホ遺跡を通る。同遺跡周辺のインカ道の特徴として、石積みによる重厚な擁壁を設けている点が挙げられているが、その理由など不明な点が多い。

おわりに

本稿では、2007年から2009年にかけて実施した文献調査ならびに踏査を報告しているが、調査対象区間をすべて踏査できていない点や、基礎的な文献に不備が認められるなどの問題が確認された。2010年以降に実施予定である基礎調査により補完する必要がある。

また本稿は、住民参加によるインカ道の保全・活用を実施するための基礎資料であるため、基礎資料の拡充と並行し、具体的な保全・活用計画について提唱するための人類学的社会調査を実施していく必要がある。以上の点を課題として、今後の調査・研究を進めていく。

注

注１）第１図はGoogle Map 2009の以下のサイトを利用している。
http://maps.google.co.jp/maps?hl=ja&ie=UTF8&ll=-8.754795,-77.277832&spn=2.084686,5.603027&z=8&pw=2

注２）第２図はGoogle Map 2009の以下のサイトを利用している。
http://maps.google.co.jp/maps?hl=ja&ie=UTF8&ll=-8.754795,-77.277832&spn=2.084686,5.603027&z=8&pw=2

参考文献

関雄二
1997 『アンデスの考古学』、東京：同成社。
関雄二・青山和夫編
2005 『岩波アメリカ大陸古代文明事典』、東京：岩波書店。
関雄二・染田秀藤編
2008 『他者の帝国－インカはいかにして「帝国」となったか』、京都：世界思想社。

Antunez de Mayolo, Santiago

1927 "Los Grandes Caminos del Imperio Incaico", *Revista del Touring Club Peruano,* - Mayo y Junio.

Cieza de León, Pedro [1553]

1973, La Crónica General del Perú., Ediciones PEISA, Lima.

Estete, Miguel [1533]

1917 "La Relación del viaje que hizo el señor capitán Hernando Pizarro por mandado del Señor Gobernador, su hermano, desde el Pueblo de Caxamalca a Pachacama y de allí a Jauja". En Urtega, Horacio H., ed., *Las Relaciones de la Conquista del Perú; por Francisco de Jerez y Pedro Sancho., Lima.* pp. 77-102.

Herrera Wassilowsky, Alxander

2001, "Investigaciónes arqueológicas en la cuenca sur del río Yanamayo, callejón de Conchucos, Perú". En Pérez, Ismael; Aguilar, Walter; Purizaga, Medardo; eds.- *XII Congreso Peruano del Hombre y la Cultura Andina "Luis G. Lumbreras".* - Lima : Universidad Naconal de San Crisóbal de Huamanga.- Tomo 2. pp. 54-82.

Hyslop, John

1984, The Inca Road System.- Orlando, Academic Press.

INC (Instituto Nacional de Cultura)

2003a, *Informe de Campaña 2003.,* Lima.

2003b, *Proyecto de Inventamiento de Información del Sistema Vial Inca - Macro Region Centro - Camino Inca Callejón de Conchucos Region : Ancash.,* Lima, INC.

2006a Program Qhapaq Ñan Informe de campaña 2005, INC, Lima.

2006b, *Proyecto de Inventario Arqueológico en la Parte Centro y Norte del Callejón de Conchucos - Región Ancash – 2006.,* Huaraz, INC, Ancash.

INEI (Instituto Nacional de Estadistica e Informatica)

2006, *Compendio Estadistico de Ancash 2005.,* Huaraz, INEI.

Morris C. and D. E. Thompson

1985, *Huánuco Pampa: An Inca City and its Hinterland.* - New York: Thames and Hudson.

Paurino Jaramillo, Mariano

2008.11.20 "Sobre Puente Colgante y Camino Inca". - Pucayacu, Llama.

Pizarro, Pedro [1571]

1978, *Relación del descubrimiento y conquista de los Reinos del Perú.,* Lima, Fondo Editorial Pontifica Universidad Católica del Perú.

Raymondi, Antonio

1876, El *Perú. -Historia de la Geografía del Perú.* - Lima, - Tomo II. 1942, Notas de Viaje, para su libro El Perú. - Lima : 1942. - Tomo III.

Regal, Alberto

1936, *Los Caminos del Inca En el Antiguo Perú.* - Lima : SANMARTI y Cia. S. A.

1972, *Los Puentes del Inca en el Antiguo Perú.* - Lima.

Ricardo Espinosa, Reyes

2002, *La Gran Ruta Inca El Capaq Ñan (The Great Inca Route The Capaq Ñan).,* Lima.

Robles G.M.W.

1933, "Cuarto Centenario de paraje en Huamalíes Diario". - "El Comercio". - Lima, - 31 : Marzo.

Sancho de la Hoz, Pedro [1534]

1968, "Relación para su majestad". En: Editores Técnicos Asociados.- *Biblioteca Peruana; El Perú a través de los siglos.*. - Lima, Editores Técnicos Asociados, Tomo I, pp. 277-343.

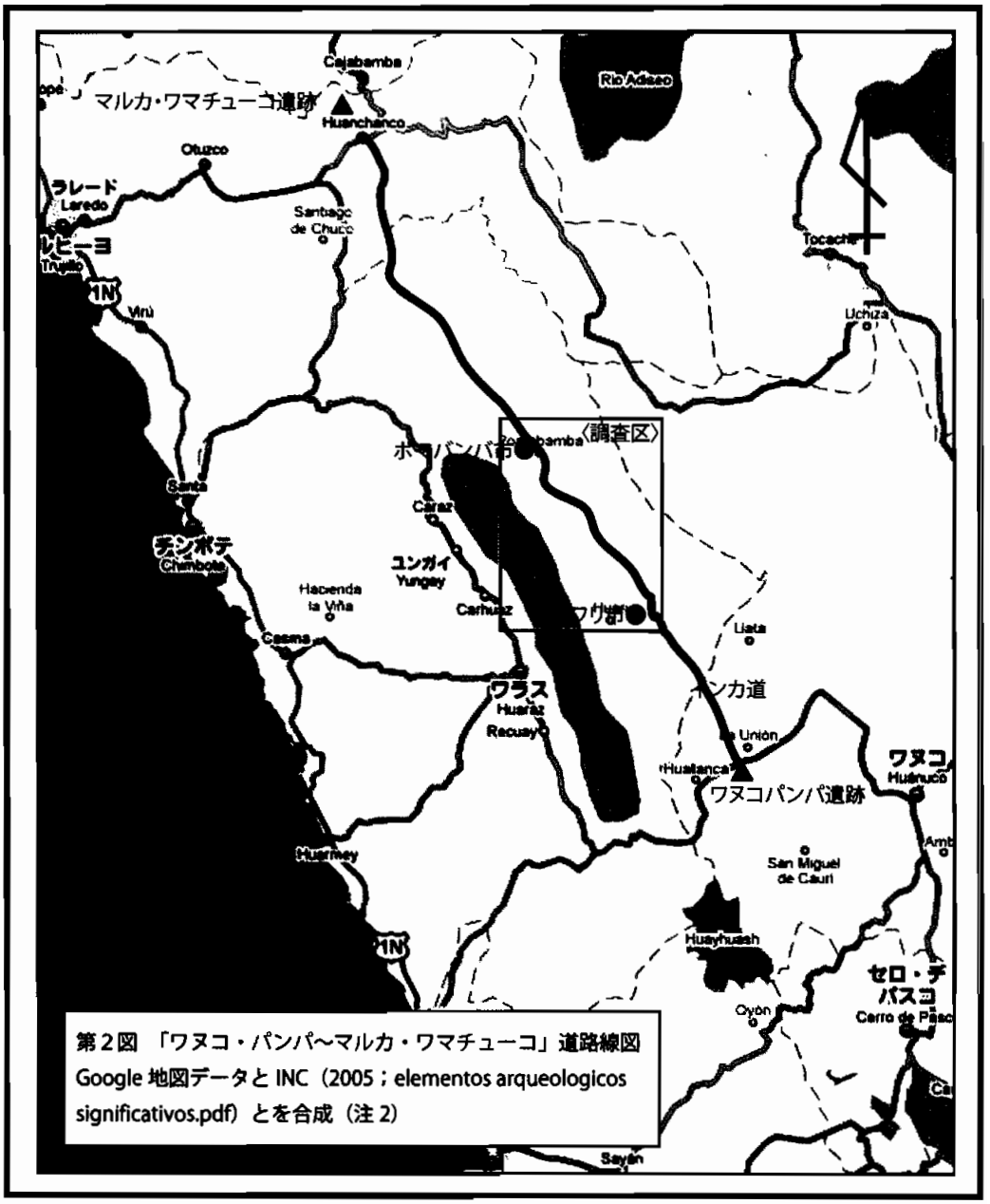
Tello Rojas, Julio César

1922, *Introdución a la Historia Antigua del Perú.* - Lima.

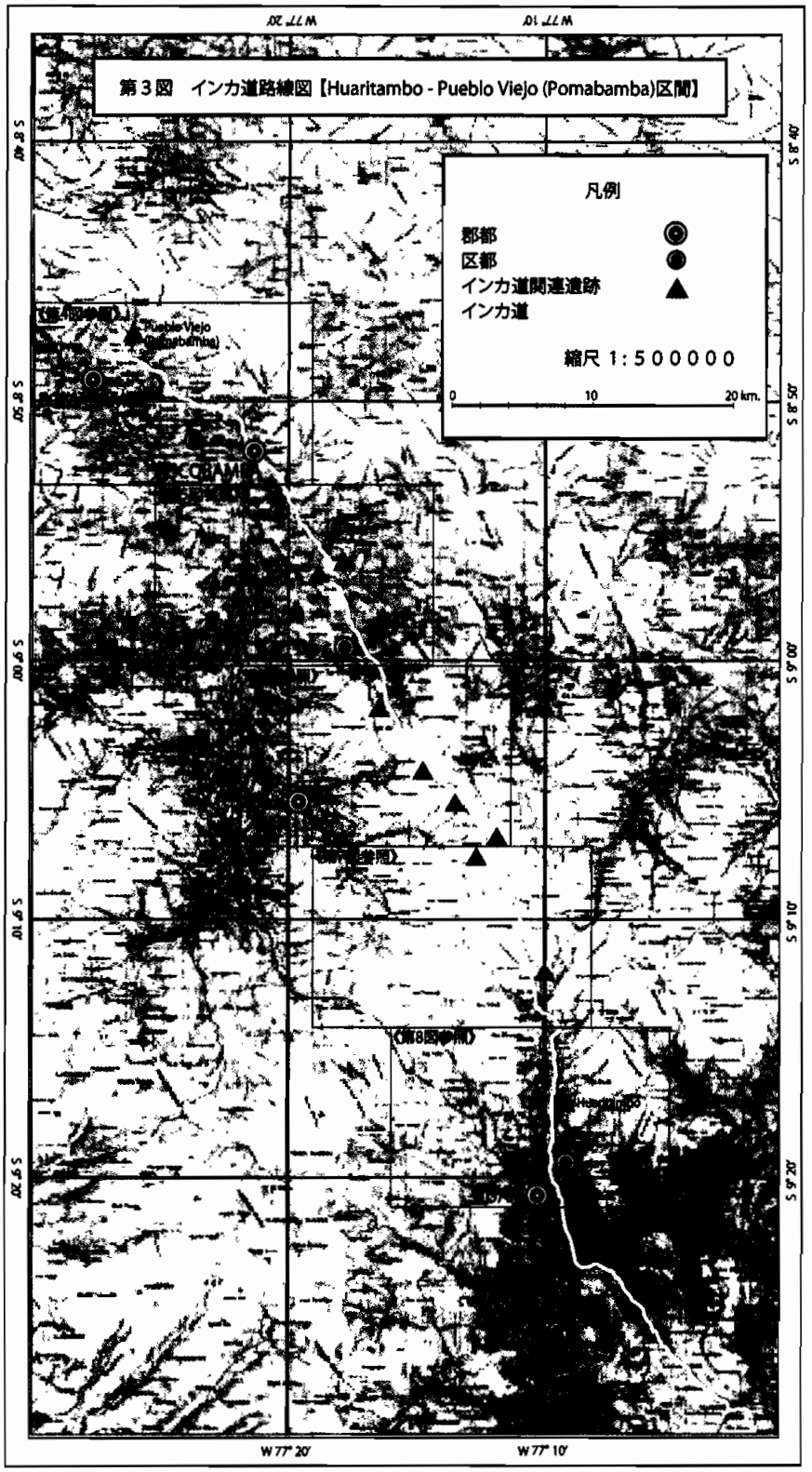
Wiener, Charles [1880]

1993, *Perú y Bolivie; -Relato de viaje. Lima,* IFEA - UNMSM, p 859

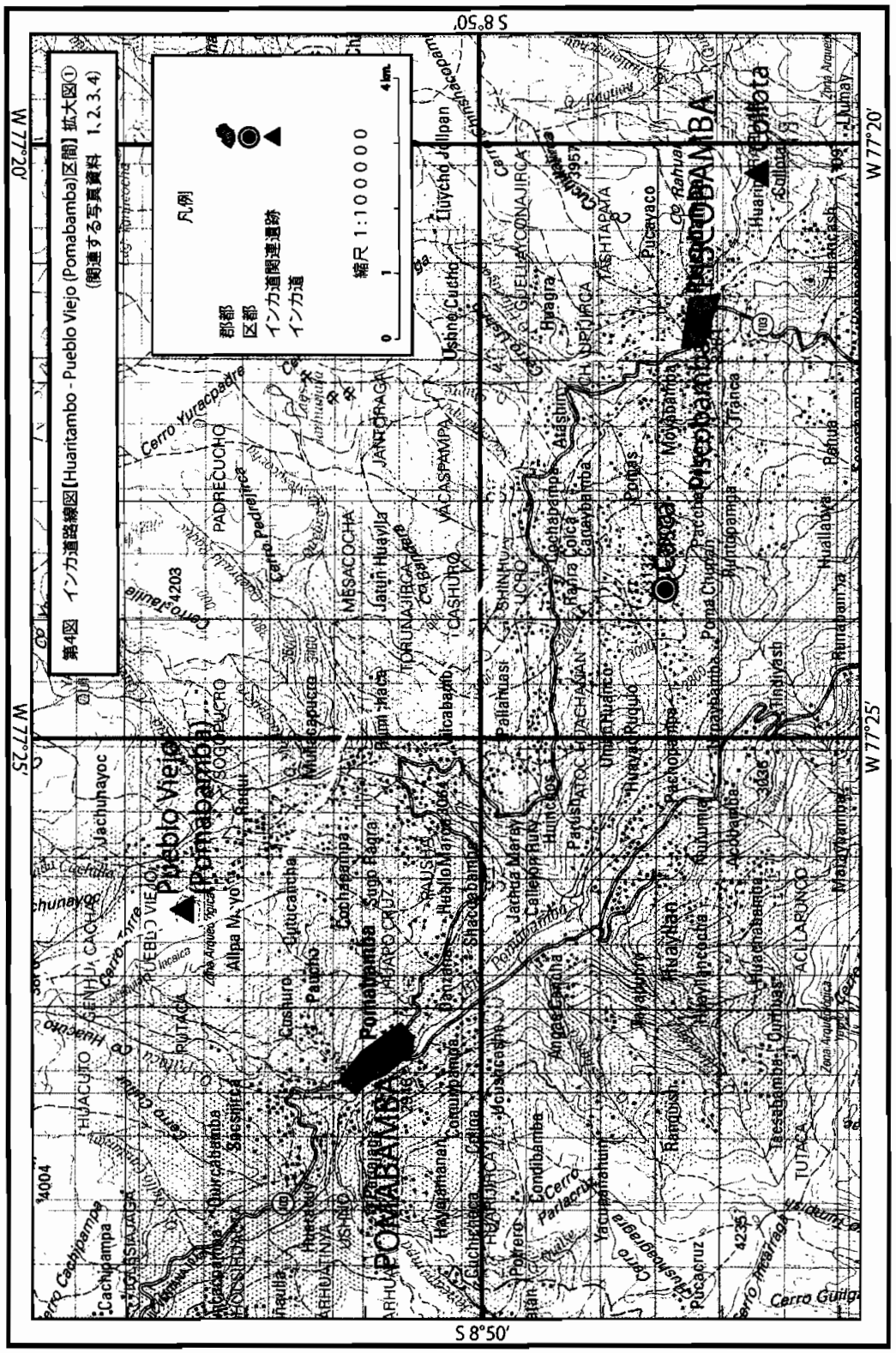
第１図　インカ道路線図
Google 地図データと関・染田（2008；ｐ３）とを合成（注１）

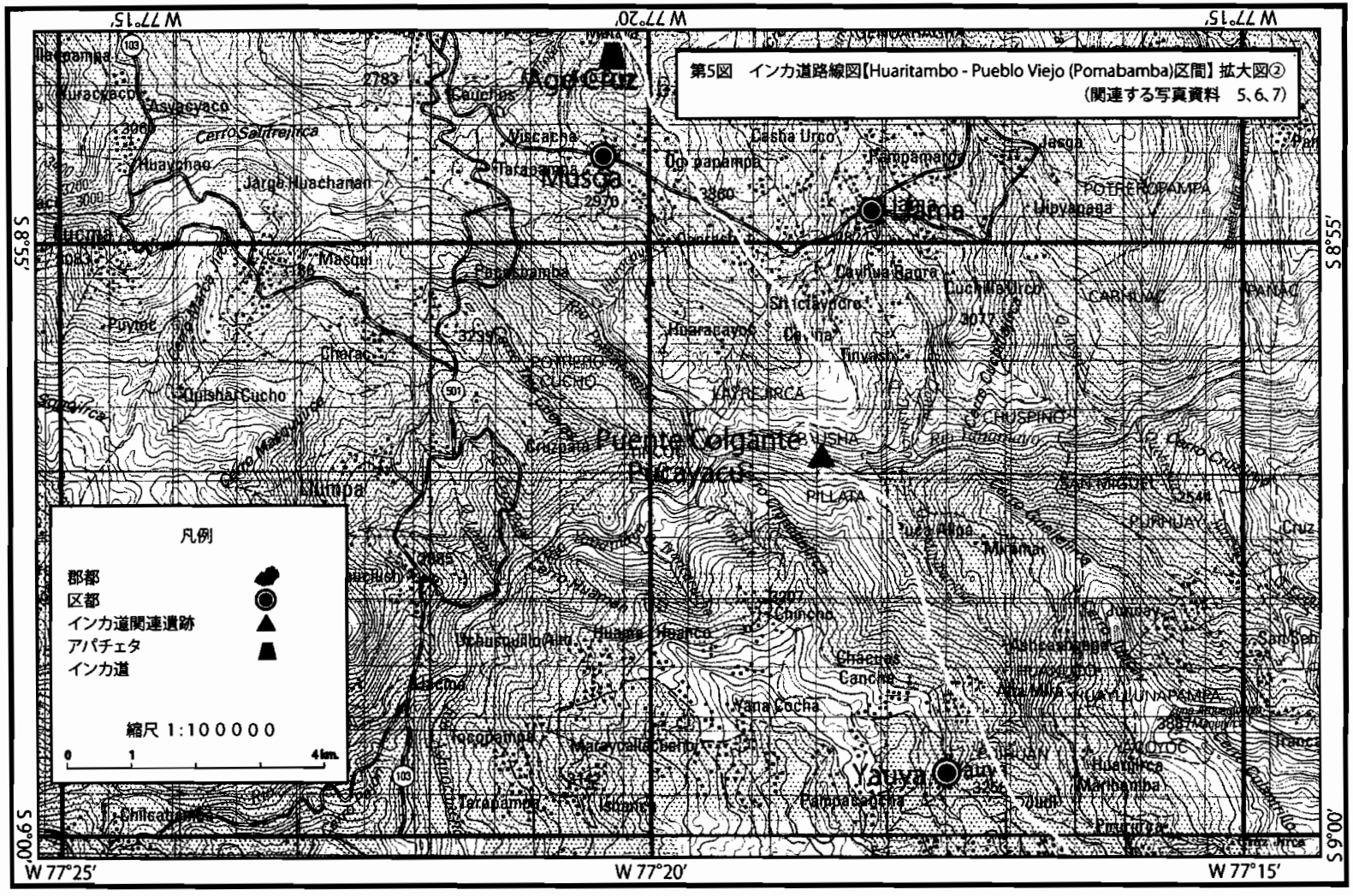


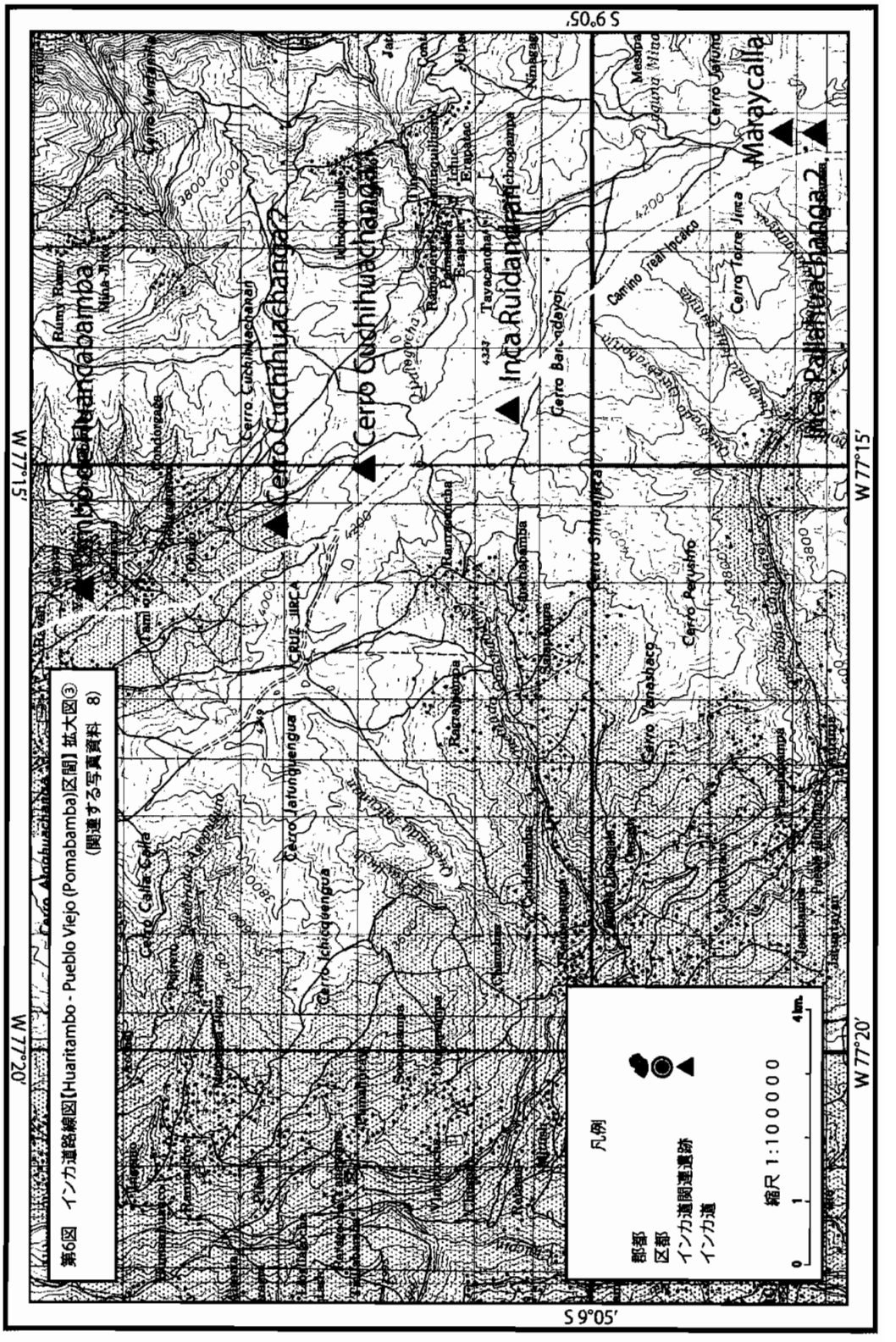
第２図　「ワヌコ・パンパ～マルカ・ワマチューコ」道路線図
Google 地図データと INC（2005；elementos arqueologicos significativos.pdf）とを合成（注２）



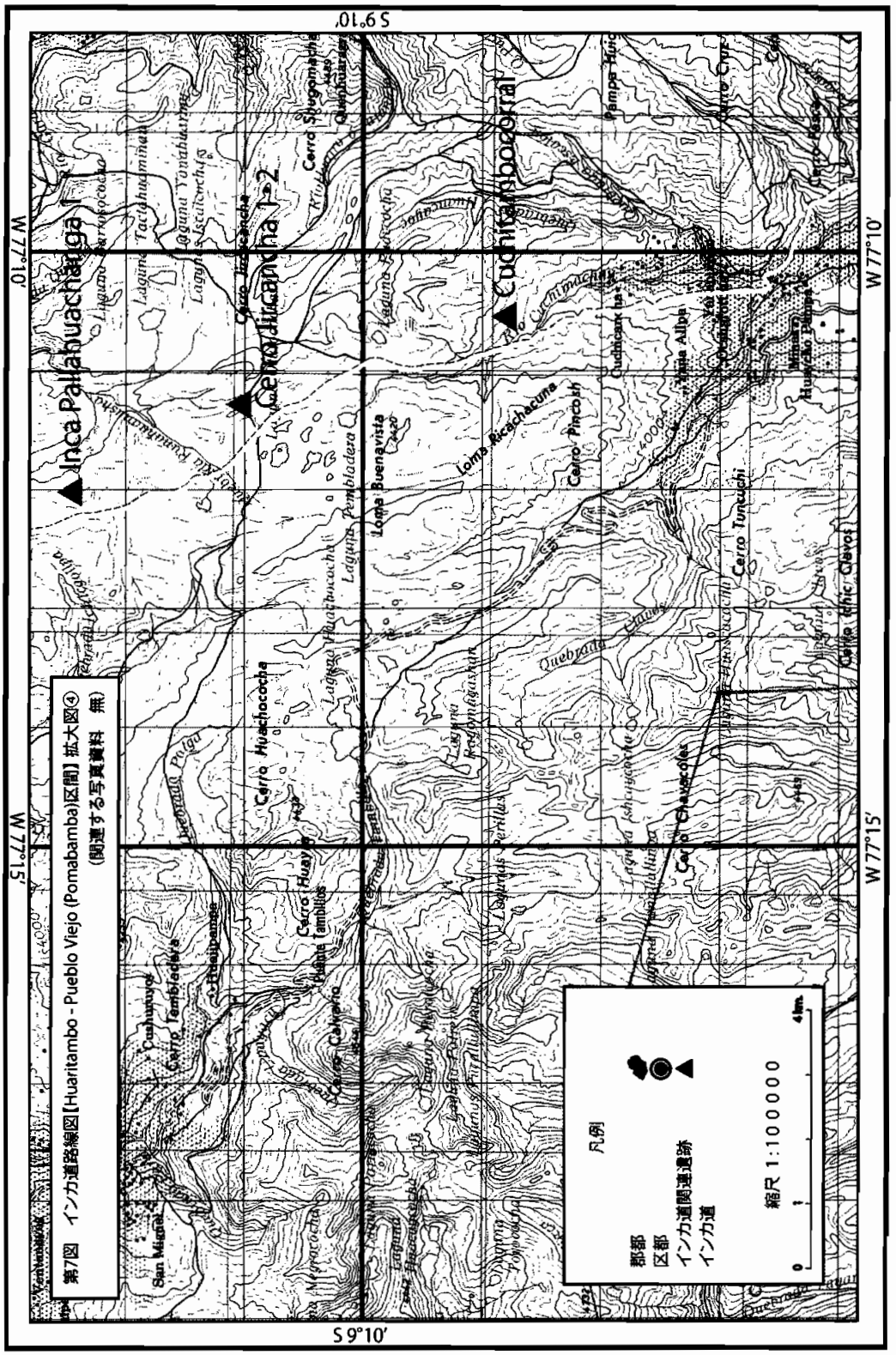
第３図　インカ道路線図【Huaritambo - Pueblo Viejo (Pomabamba)区間】

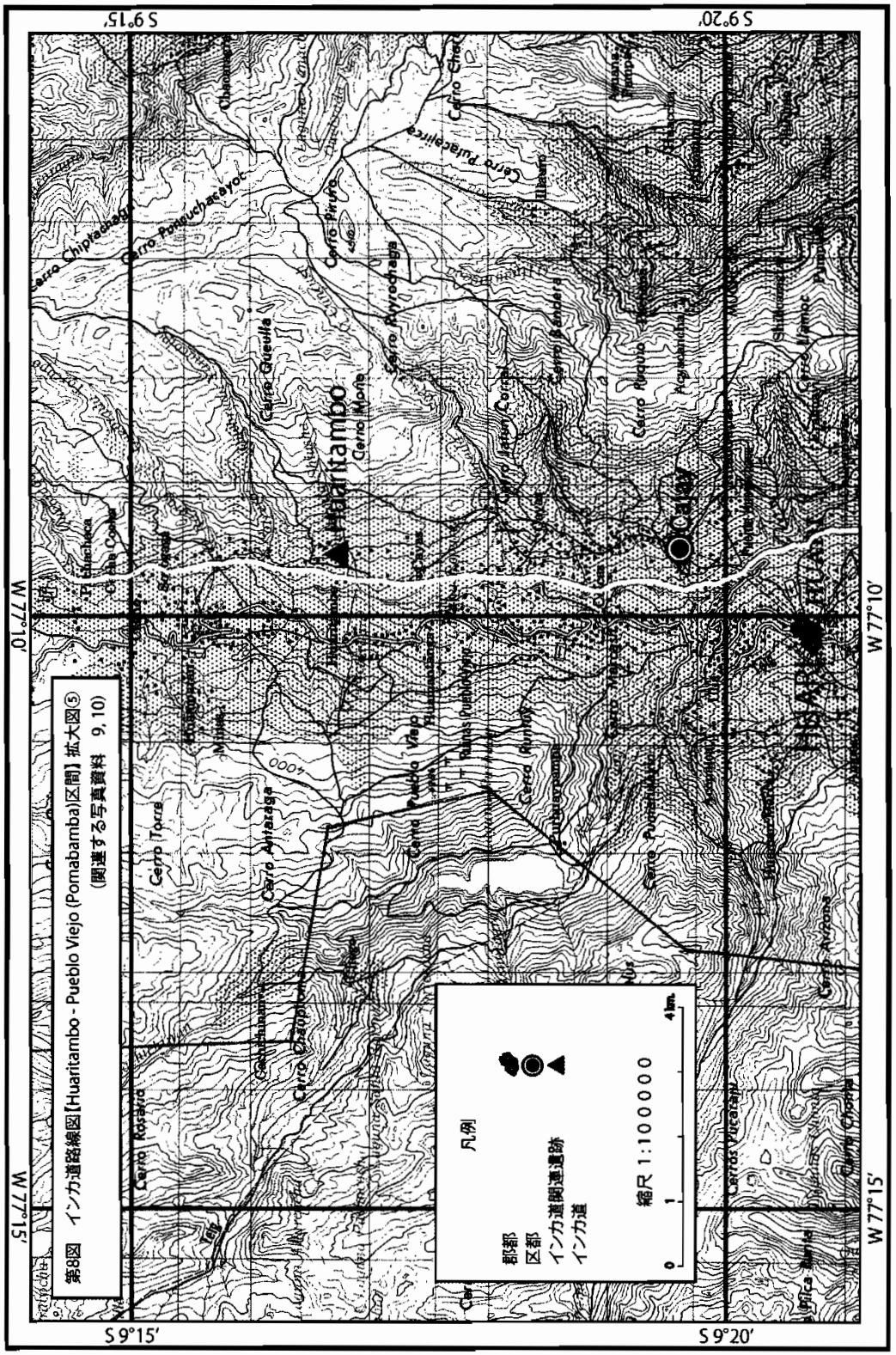

第4図　インカ道路線図[Huaritambo - Pueblo Viejo (Pomabamba)区間] 拡大図①
(関連する写真資料　1、2、3、4)
凡例
都都
区都
インカ道関連遺跡
インカ道
縮尺 1:100000
0
1
4km
Pueblo Viejo
(Pomabamba)
Pomabamba
POMABAMBA
Huaritambo
Cerro Yuracpadre
PADRECUCHO
MESACOCHA
JANTCRAGA
Cerro Pedrejirca
Cerro Cashuro
Cerro Tarte
Cerro Cachipampa
Cerro Parlacruz
Cerro Guilg
Cerro Huallaga
Cerro Yacuarahuni
Cerro Chuchuagarga
Cerro Huaytapallana
Cerro Huaylla
Cerro Huaycaccha
Cerro Huaycaccha
Cerro Huaycaccha


W 77°15′
W 77°20′
W 77°25′
S 8°55′
S 9°00′
凡例
郡都
区都
インカ道関連遺跡
アパチェタ
インカ道
縮尺 1:100000
0
1
4km
Puente Colgante
Pucayacu
Yauya
Musga
Huarita
Agua Cruz
Cerro Salitrejirca
Jarge Huachanan
Huaychao
Asyacyaco
Huracyaco
Llacpampa
Tucma
Masqui
Puytoc
Cherac
Quishar Cucho
Mumpa
Viscacha
Tarapampa
Castia Urco
Pampamarca
Jasqa
POTRERO PAMPA
Ubyanaga
Cayllva Bagra
Huaracayoc
Tinyash
LAYREJRCA
CHUSPINO
PILLATA
SAN MIGUEL
PURHUAY
Chincha
Chacras
Cancha
Yana Cocha
Pampasecha
Marbamba
Huarica
Chilcatambo
Tarapampa
Tocopampa
Huaqra Huarco
Chuquillo Alto
Tacna
Cruz
Jirca
Tranca
Pucuhuay
Pinchuyoc
Huarica
Marbamba
Pampasecha
Yana Cocha
Chacras
Cancha
Chinchin
Huaqra Huarco
Chuquillo Alto
Tacna
Tocopampa
Tarapampa
Chilcatambo



第6図　インカ道路線図【Huaritambo - Pueblo Viejo (Pomabamba)区間】拡大図③
（関連する写真資料　8）


第7図　インカ道路線図【Huaritambo - Pueblo Viejo (Pomabamba)区間】拡大図④
(関連する写真資料　無)
凡例
都部
区部
インカ道関連遺跡
インカ道
縮尺 1:100000
0
1
4km.
Inca Pallahuachanga
Cerro Huachococha
Cerro Huachococha 1-2
Cuchicancha
Cuchicancha 1-2
Cerro Huachococha
Cerro Huayra
Cerro Calcaria
Cerro Tambiechara
Cerro Pincoh
Cerro Tuncuchi
Cerro Clavocolas
Loma Buenavista
Loma Ricachacuna
Laguna Pembladera
Laguna Huachococha
Laguna Tacchuyminan
Laguna Yonahuarina
Laguna Iscaltorchis
Laguna Parcococha
Cerro Shugnahuilca
Cerro Jacchococha
Pampa Alpa
Pampa Huayllo
San Miguel
Cashuayo
Quebrada Palga
Quebrada Chaupe
Quebrada Pencoyacu
Quebrada Cuchicancha
Quebrada Tuncuchi
Quebrada Chaupe
Quebrada Huachococha
Quebrada Huachococha
Quebrada Pencoyacu
Quebrada Pencoyacu
Quebrada Chaupe
Quebrada Tuncuchi
Quebrada Cuchicancha
Quebrada Chaupe
Quebrada Chaupe
Quebrada Chaupe



第8図　インカ道路線図【Huaritambo - Pueblo Viejo (Pomabamba)区間】拡大図⑤
（関連する写真資料　9, 10）

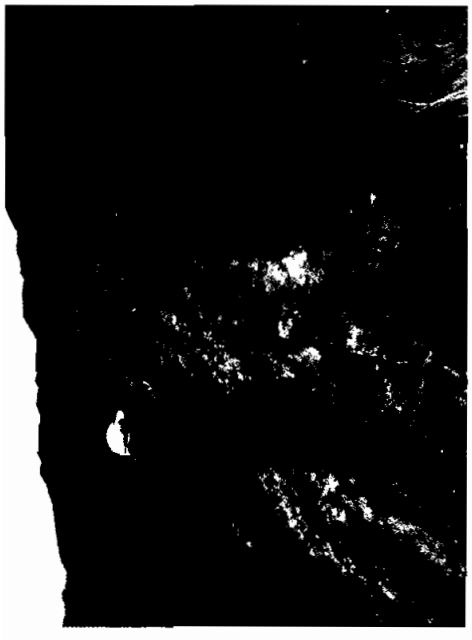


写真1　プエブロ・ビエッホ遺跡周辺のインカ道

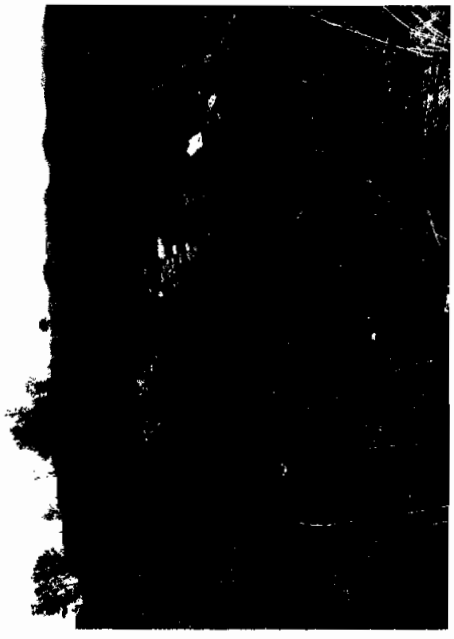


写真2　農地開発によるプエブロ・ビエッホ遺跡の破壊

写真3　プエブロ・ビエッホ遺跡

写真4　ピスコパンパ市内のインカ道関連遺構：階段

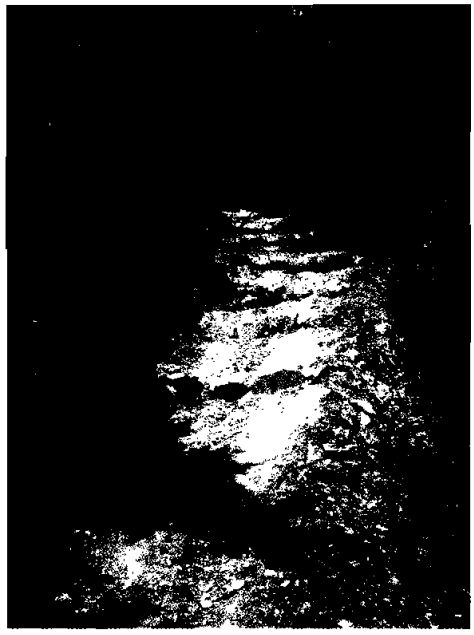


写真6　プカヤクの吊橋付近のインカ道

写真8　マラカイ遺跡（撮影 Ariel Ramirez Rodriguez）

写真5　プカヤクの吊橋～アゴ・クルス間のインカ道

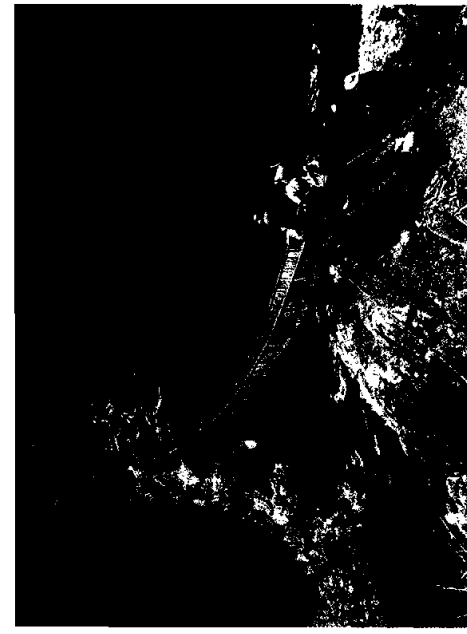


写真7　プカヤクの吊橋

写真 9　ワリ郡のインカ道関連遺構：水路
（撮影 Ariel Ramirez Rodriguez）

写真10　ワリ郡のインカ道
（撮影 Ariel Ramirez Rodriguez）